

中世のロマン 山王坊遺跡

国道339号線を北上し市浦相内地区へ入ると右手に赤い大鳥居が見えてきます。その大鳥居をくぐり、山王坊川に沿って山奥に進むと日吉（ひえ）神社があり、一帯は「山王坊」とも呼ばれています。

「山王」とは滋賀県大津市坂本にある日吉（ひよし）大社の別称であり、境内の入り口には合掌形の破風（装飾版）を鳥居の上に付けた「山王鳥居（今号表紙）」が参拝者を迎えてくれます。その鳥居をくぐり山林に囲まれた神社境内を過ぎると、敷地内の最奥部、日吉神社の本殿に突き当たります。一帯は古来より霊験あらたかな地として地域住民に畏敬の対象とされ、大切に守られてきました。

昭和57年から合計13回の発掘調査により、最奥部丘陵平坦面に創建時の中心となった僧侶や安藤氏一族と考えられる方形配石墓を中心とした奥院跡、山王坊川西岸の平坦地の中心部に南側から拝殿、渡り廊下、舞台、本殿を直線的に配置した山王坊日吉神社跡、西側丘陵部山際から仏堂跡などが確認され、安藤氏関連の神社仏閣として往時の繁栄が窺われます。

教育委員会では、国指定史跡を目指し、作業を進めています。



発見された仏堂の礎石跡



発見された礎石建物跡

平成27年度新作立佞武多

津軽十三浦伝説 白髭水と夫婦梵鐘

12月11日、市は平成27年度新作立佞武多の下絵を発表しました。

題名は「津軽十三浦伝説 白髭水と夫婦梵鐘（つがるとさうらでんせつ しらひげみずとめおとぼんしょう）」。

制作者の福士裕朗技能技師は「五所川原市合併10年という節目の年であり、さらに旧3市町村が一体感を醸成できる題材を模索した」と話しました。

新作立佞武多は7月初旬完成予定です。

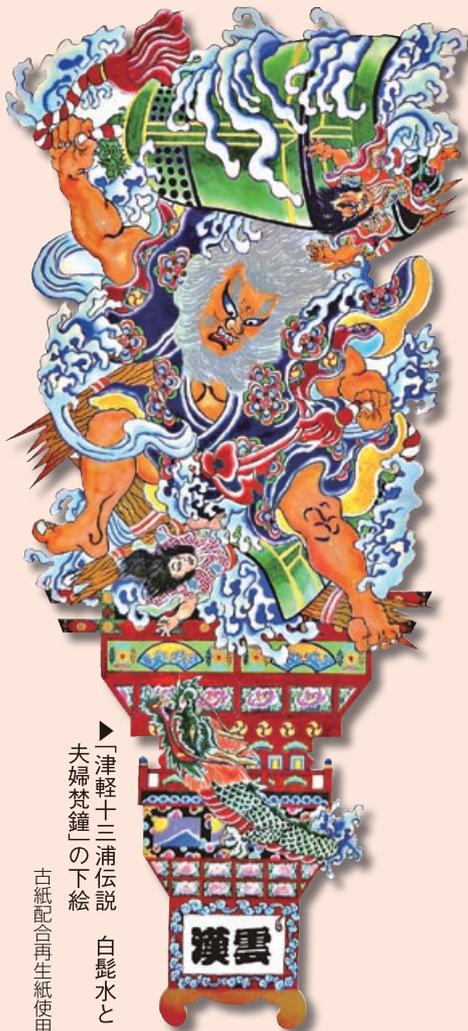
新作立佞武多解説

十三湖がかつて十三浦（とさうら）と呼ばれていた頃、たびたび襲われる大洪水・津波を白髭水と呼んでいた。白髭の老人がその波に乗りやってくるからだと言う。この十三浦にまつわる儂い恋伝説がある。

1715年、飯詰にある長円寺で開山聖眼雲祝大和尚の報徳の梵鐘をつくることとなった。兄寺である弘前市長勝寺でも大いに喜び、同様の梵鐘をつくることとなり、一对の梵鐘を京都の近藤丹波藤久に依頼した。翌1716年、京都で誕生した一对の夫婦梵鐘は海路日本海を経て、五所川原と弘前を目指したところが、船が十三浦に入港しようとした時、大荒れの時化に襲われ、梵鐘は海底深く沈んでしまった。後日、長円寺・長勝寺の檀徒らと十三の漁民多数で梵鐘の捜索を行い長円寺の雄鐘は引き上げたが、長勝寺の雌鐘はとうとう見つけれなかった。後に、長円寺に納められた雄鐘を衝くと『十三恋しやゴーン』と引き裂かれた悲しみに溢れた音色がするという。

もう一説には、梵鐘の雌雄は龍の形をした釣り金具で区別されており、雌龍に一目惚れした十三浦の龍が我が物にしようとして引きずり込んだという伝説もある。

新作立佞武多は、夫婦梵鐘が白髭水により引き裂かれた場面を表現したものである。



「津軽十三浦伝説 夫婦梵鐘」の下絵

白髭水と

古紙配合再生紙使用